

豚吉とヒヨロ子
三鳥山人（みどりさんじん）（夢野久作）

豚吉（ぶたきち）は背（せい）の高さが当り前の半分位しかないのに、その肥り方はまた普通（あたりまえ）の人の二倍の上もあるので、村の人がみんなで豚吉という名をつけたのです。又、ヒヨロ子も同じ村に生れた娘でしたが、背丈（せた）けが当り前の人の倍もあるのに、身体（からだ）はステッキのように細くて瘠（や）せていたので、こんな名前を付けられたのです。村の人はこの二人を珍らしがってヤイヤイ騒ぎますので、二人は外へ出ることも出来ません。そのうちに二人とも立派な大人になりました。

ある時、村の人たちの寄り合（あい）がありました。その時に誰か一人が、「あの二人を夫婦にしたらなおなお珍らしかろう。村の名物になると思うがどうだ」と云いますと、みんな一時に、「それがいいそれがいい」

と手をたたいてよろこびまして、そこに居た二人の両親にこの事を話しますと、両親も、「村の人がみんなですすめられるのならよろしゅう御座います」と云いました。それから二人に聞いて見ますと、二人はまだ会ったことはありませんが、かねてからお互に人と違った身体（からだ）を持っていることを思いやっ、両方で可愛そうに思っていたところですから、喜んで承知いたしました。

村の人はいよいよ喜びました。「サア面白いぞ。世界中にない珍らしい夫婦がこの村に出来るのだ。村中で寄ってたかって大祝いに祝え」

というので、大騒ぎをやって用意をしましたので、まるで殿様の御婚礼のような大仕かけな婚礼の支度が出来ました。

そうして、いよいよ婚礼の儀式がある晩となりますと、村中の人は皆、あらん限りの立派な着物を着飾って、神様の前の広場に集まりました。

神様の前の広場には、作り花で一パイに飾られたお儀式の場所が出来ていまして、そのうしろに出来た宴会場には、村の人々が作った御馳走やお酒が一パイに並んでいます。まわりには篝火（かがりび）がドンドン燃やしてありますので、そこいらは真昼のように明かるく見えました。

そのうちに、町から来た楽隊が賑（にぎ）やかな音楽を初めて、時間が来たことを知らせましたので、みんな神様の前に集まって、礼服を着た神主と一所に、珍らしい夫婦の豚吉とヒヨロ子が来るのを今か今かと待ちました。

けれども、いくら待っても夫婦の姿は見えませんでした。そのうちに、二人を迎えに行った美しい花馬車が二台帰って来ますと、それには二人の姿は見えず、二人の両親が泣きながら乗っておりましたが、みんなの前に来ますと、

「皆さん、申しわけありません。二人は逃げてしまいました」と云いました。

「サア、大変だ」と村中の人は騒ぎ出して、儀式も御馳走も打ち棄てて、大勢の人々が夜通しがかりで探しましたが、二人の姿はどこにも見えませんでした。

豚吉とヒヨロ子は、こうして大勢の人々が騒いでいる時、村からずっと遠い山道を手を引き合っ、てのぼっておりまして、

「ふたりで夫婦になったら、今迄よりもっともっと恥かしくなるよ」
「ほんとですわねえ。とても村には居られませんよ。けれどもみんな心配しているでしょうね」
「しかたがない。こうして出かけなければ、一生涯に外に出る時は無いからね」
「ほんとに情のう御座います。どうかして私たちの身体（からだ）を当り前の人のようにする工夫は無いのでしょうか。私はいつもそのことを思うと悲しくて……」

とヒヨロ子は泣き出しました。「泣くな泣くな」豚吉は慰さめました。「それはおれでも同じことだ。今に都に行ったらば、よいお医者にかかって治してもらってやるから、泣くな泣くな」

こう云ってあるいているうちに、二人は山を越えて広い街道に出ますと、夜が明けました。豚吉は今まで威張っておりましたが、ここまで来ると、身体（からだ）が肥っておりまして、ヘトヘトに疲れてしまいました。

「おれあもうあるけない」

と豚吉は泣きそうな声で云いました。

「まあ、あなたは何て弱い方でしょう。私がおぶってあげましょうか。あたしはこんなに瘠せてても、力はトテモ強いんですよ」

「馬鹿なことを云うもんじゃない。おれは人の三倍も四倍も重たいんだぞ。そんなことをして、大切なお前が二つに折れでもしたら大変じゃないか」

「いいえ、大丈夫ですよ。私は人の五倍も六倍も力があるのですから」

「いけないいけない。そんなことをしたらなお人に笑われる。それより休んだ方がいい。ああ、くたびれた」

「でも、あとから村の人が追っかけて来ますよ」

「虎が追っかけて来たって、おれはもう動くことが出来ない。休もう休もう」

と云ううちに、その草の上にドタンと尻もちをつきました。

ヒョロ子は困ってしまって、立ったまま四方を見まわしますと、ずっと遠方から馬車が一台来るのが見えました。ヒョロ子は喜ぶまいことか、大声をあげて、

「馬車屋サーン。早く来て頂戴よ」

とハンケチを振りました。

「何、馬車が来た」

と豚吉も立ち上りましたが、背が低いので見えません。

「何だ、草ばかりで見えやしない」

「そんなことがあるもんですか。ソレ御覧なさい」

と云ううちに、豚吉を抱えて眼よりも高くさし上げました。

「アッ、見えた見えた。オーイ、馬車屋ア。早く来　　イ」

と豚吉も喜んでハンケチを振りました。

これを見た馬車屋のお爺さんはビックリしました。

大変に高い、大きな恰好をした人間が呼んでいる。早く行って見ようと思いましたが、馬の尻を鞭でたたいて宙を飛ばしてかけつけました。

「やあ、これあ珍しい御夫婦だ。おれああんた方のような珍しい御夫婦は初めて見た。どうもえらく高い人だな。別嬪（べっぴん）さんの方はまるで棹（さお）のようだ。それに又、旦那様の肥って御座ること、どうだ。まるで手まりのようだ」

と馬車屋は大きな声で云いながら近寄って来ましたので、夫婦は真赤になってしまいました。

「あたしはこんな馬車屋さんの馬車には乗らない。今にどんなことを云ってひやかすかわからないから」

とヒョロ子は云いました。

「馬鹿を云え。一所に乗って行かなければ何にもならないじゃないか……。どうだい、馬車屋さん。これから町まで倍のお金を払うから、大急ぎで乗せて行ってくれないか」

と云いました。

馬車屋は大きな手をふって云いました。

「滅相な。お金なんぞは一文も要りません。あんた方のような珍しい夫婦を乗せるのは一生の話の種だ。さあさあ、乗ったり乗ったり」

と云ううちに、馬車のうしろの戸をあけてくれました。

ところが、その入り口が小さいので、豚吉の肥った身体（からだ）がどうしても這入りません。しかたがありませんから、馬車の前の馭者台（ぎょしゃだい）の処にお爺さんと並んで乗って、ヒョロ子だけ中に這入らせようとするすと、天井が低いので、ヒョロ子がしゃがんでも頭が支（つか）えま。そればかりでなく、豚吉が右側に乗ると馬車が右に引っくり返りそうになり、左に乗ると左側の車の心棒が曲りそうになります。

「これあ大変なお客様だ。折角無代価（ただ）で乗ってもらおうと思っているのに、二人共乗れないとは困ったな」

「おれも乗りたいけれども、これじゃ仕方がない」

「もうよしましうや。あなたも些（すこ）し辛棒しておあるきなさいよ」

こんなことを云っているうちに、馬車屋のお爺さんは不意に手をポンとたたいて、

「うまいことを思い付いた。二人とも馬車の屋根に乗んなさい。私がソロソロあるかせるから」

「ウン、それはいい思い付きだ」

と豚吉もよろこびました。けれども背が低いので登ることが出来ません。

これを見たヒョロ子は、イキナリ豚吉をうしろから抱（かか）えて、ヒョイと馬車の屋根に乗せまして、自分も飛び上がりました。

馬車屋のお爺さんはビックリして眼をまん丸にしていました。

馬車が動き出すと、屋根の上がまん丸くなって今にも落ちそうになりますので、夫婦はしっかり

抱き合っていないければなりません。

そのうちに一つの村に来ますと、サア大変です。村の入り口に遊んでいた子供たちがすぐに見つけて、

「ヤア、定(さだ)っぽの馬車の上に長い長い女と短い短い男と乗っている。おもしろいおもしろい」

と村へ走って帰りましたので、ちょうど朝御飯をたべていた人達は、皆一時に表に飛び出しました。見ると成る程、今までに見たことのない奇妙な夫婦が、馬車の上に乗ってソロリソロリとやって来ますので、皆不思議がってワイワイ云い初めました。

「珍しい夫婦だな」

「兄妹(きょうだい)だろうか」

「女の方は飴(あめ)の人形を引き延したようだ」

「男の方はまるで踏(ふ)み潰(つぶ)したようだ」

「どこへ行く人だろう」

「都へ見世物になりに行くんだろう」

「見世物になったら大評判だろうな」

「今なら無料(ただ)だ」

「ヤア無料(ただ)の見世物だ。みんな、来い来い。世界一の珍しい夫婦だ。無料(ただ)だ無料だ」

馬車の上からこれをきいた豚吉夫婦は真赤になって憤(おこ)りましたが、今にも屋根から落ちそうなのでどうすることも出来ません。

けれどもヒョロ子はとうとう我慢し切れなくなって、馬車屋のお爺さんの横に掛けてあった鞭(むち)を取ると、いきなり馬のお尻をカーパイ打ちました。

豚吉とヒョロ子を乗せた馬はヒョロ子にいきなり尻を打たれましたので、ビックリしてドンドン駆け出しますと、間もなく村を出てしまいました。

ところが豚吉は、今まで馬車がゆっくりあるいてさえ落ちそうであったのに、それが矢のように走り出したのですからたまりません。

「アッ、大変、お爺さん、馬車を止めてくれ、落ちそうだ落ちそうだ、助けてくれ、アブナイアブナイ」

とヒョロ子に獅噛(しが)み付きました。

ヒョロ子も一生懸命になって豚吉を落ちないように押えておりましたが、馬車が村を出ると間もなく、そこにあった道のデコボコに馬車が引っかかってガタンガタンとはね上る拍子(ひょうし)に、二人共抱き合ったまま馬車の屋根の上から往来へ転がり落ちました。

馬車屋のお爺さんの方は馬を引き止めようとして一生懸命に手綱を引っばっていたので、そのままドンドン駆け行ってしまいました。

「ああ、危なかった」

と、豚吉はヒョロ子に助け起されながら云いました。

「ほんとに済みませんでした。私がいたずらをしたもんですから」

とヒョロ子はあやまりましたが、見ると自分の足もとに車屋さんの長い鞭が落ちています。

「アッ、これはさっきの車屋さんのだ。私が走って行って返して来ましょう」

とヒョロ子は駆け出しそうにしますと、豚吉は引き止めました。

「チョット待て、何だかたいそういいにおいがする」

「ほんとにおいしいにおいがしますね」

「ああ、おれはあの臭(におい)をきいたので、お腹がすっかりすいちゃった」

「まあ、あなたは喰いしんぼうね」

「だって、ゆうべから何もたべないんだもの」

「あたしなんか何日御飯をたべなくとも何ともないわ」

「おれあ日に十ペん御飯をたべても構わない。ああ、御飯がたべたい」

「そんな大きな声を出すものじゃありませんよ」

とヒョロ子は真赤になって止めました。

けれども、豚吉は鼻をヒョコヒョコさせながら、あたりを見まわしながらなおなお大きな声で云いました。

「このにおいは、御飯のにおいと、葱(ねぎ)と豆腐のおみおつけの臭(におい)だが、一体どこから来るのだろうか」

「そんな卑(いや)しいことを云うもんじゃありません。よその朝御飯ですから駄目ですよ」

「イヤ、あれを見る。あの森のかげにめしや[# 「めしや」に傍点]と書いて旗が出ている。あすこだあすこだ」

と云ううちに、ドンドン駆け出して、そのうちへ這入って行きました。

「まあ、何て意地のキタナイ人でしょう。さっきは疲れてあるけないと云っていたのに、今はあんなにかけ出して……しかたがない。私も一所に御飯をたべましょう」

と云いながら、ヒョロ子もあとからかけ出して行きましたが、門口まで来ると、又立ち止まって、軒の先にさっきの鞭（むち）をよく見えるようにつきさして中に這入って行きました。

見ると、先に這入った豚吉は葱と豆腐のお汁を熱い御飯にかけて、フウフウ云いながら一生懸命で掻き込んでいます。

「まあ、あなたは何てみっともないたべ方をするんでしょう。そんなことをして喰べると人に笑われますよ」

と云いながら座りましたが、やがてめしや [# 「めしや」に傍点] のおかみさんが持って来たお汁と御飯を引き寄せますと、お汁をちょっと嘗（な）めまして、それからハンケチで口のまわりをよく拭いて、今度は御飯をほんの二粒か三粒ばかり固めて口の中に入れました。

夫婦はこんな風にして御飯をたべ初めましたが、豚吉の方はすぐに喰べてしまいましたけれども、ヒョロ子の方はなかなか済みません。やっぱり一粒か二粒宛（ずつ）たべては、お汁をすこしずつ嘗（なめ）るばかりです。豚吉は初めのうちは我慢してジッと待っておりましたけれども、とうとう我慢しきれなくて冷かし初めました。

「お前はまあ何て御飯のたべ方をするんだ。そんなたべ方をしていると、今にお正午（ひる）になって、昼の御飯と一所になってしまうぞ」

これをきいたヒョロ子は、真赤になって豚吉を睨みました。

「黙っていらっしゃい。あなたのように牛か馬見たようなたべ方をするもんじゃありません。それに私は身体（からだ）が細長いから、御飯の通る道も当り前の人より細長いのです。あなたみたいにドッサリ口に入れたら、すぐに詰まって死んでしまうのです。私が死ぬのが厭（いや）なら溫柔（おとな）しく待っていらっしゃい」

と、なかなか云う事をききません。豚吉は大きなあくびをして立ち上りました。

「ヤレヤレ大変なお嬢さんだ。待っているうちに、又お腹がすいて喰べたくなりそうだ。それじゃおれは外を散歩して来るから、ごゆっくり召し上れ」

と云って、裏の方へ出かけました。

豚吉は裏の方へ来て見ますと、ちょうど春で、野にはいろいろな花が咲き、蝶が舞い、雲雀（ひばり）が舞っています。あんまりいい景色ですから、豚吉はぼんやり立って見ていますと、すぐ眼の前の古井戸の口で遊んでいた一人の女の児（こ）が、どうしたはずみか井戸の中へ落ちました。

豚吉は驚いて駆け寄りますと、暗い底の方から女の子の泣き声がきこえます。けれども、そこいらに梯子（はしご）もなければ綱もありません。

豚吉は困りましたが、放っておけば女の児が死にそうですから、すぐに上衣を脱いで、ズボンを脱いで、シャツ一枚になって井戸の中へ真逆様（まっさかさま）に飛び込みました。

ところが身体（からだ）が大きいものですから、底へ達（とど）きません。それどころか、ほんの入り口の処へ身体（からだ）が一パイに引っかかって、動くこともどうすることも出来なくなりました。

豚吉は驚きました。

「助けてくれ助けてくれ」

と一生懸命で怒鳴りましたが、身体（からだ）が井戸の口に塞（ふさ）がっているので外へはきこえず、おまけに下では女の児が泣き立てますので、その八釜しいこと、耳も潰れるばかりです。しまいには豚吉も情なくなって、オイオイ泣き出しました。下からは女の児が泣きます。けれども誰にもきこえませんが、助けに来てくれる人がありません。

その中（うち）に豚吉は声が涸（かれ）てしまいました。

ところへ、井戸へ落ちた児のお母さんが、子供はどこに行ったかしらんと探しながらやって来ましたが、見ると、大きな短い足が二本、井戸の中からニューと突出てバタバタ動いています。驚いて走り寄って見ますと、大きな身体（からだ）が井戸の口一パイになっていて、下の方から自分の子供の泣き声がきこえます。

お母さんは肝を潰すまいことか。

「まあ、妾（わたし）の娘はどうしてこんなに急に大きくなったんだらう。何だか男のような恰好（かっこう）だけれど、泣いてる声をきくとうちの子のようだ。何にしても助けて見なければわからない」

と云いながら、急いでその足を捕えて引っばって見ましたが、どうしてなかなか抜けそうにもありません。

お母さんはいよいよ慌てて村の方へ駆け出しました。

「助けて下さい。うちの娘が井戸の口一パイに引っかかって泣いています。早く誰か来て助けて下さい」

と泣きながらお母さんが叫びますと、村の人々はみんなビックリしました。

「それは珍しい話だ。まさか井戸の水を飲んでそんなにふくれたんじゃあるまいが……行って見る行って見る」

と大勢押しかけて来ますと、成る程、井戸の中から大きな足が二本突出てバタバタやっている下から女の児の音がします。

「これは不思議だ。足は男のようだが、声は女の子の声だ」

「変だな」

「面白いな」

「奇妙だな」

「何でもいから早く引っぱり出して見よう。そうすればわかる」

「そうだそうだ」

と云ううち、大勢寄ってたかって引っぱり初めましたが、身体（からだ）が井戸の口にシッカリはまっている上に重たいのでなかなかぬけません。

「これはどうだ。中々（なかなか）抜けない」

「どうしたらいいだろう」

「仕方がない。車仕掛けで引き上げよう」

「そうだそうだ。それがいいそれがいい」

と云うので、今度は村長さんのところへ行って井戸の水汲み車を借りて来まして、綱の一方に豚吉の足を結びつけて、その綱を車に引っかけると、大勢でエイヤエイヤと引き初めました。

豚吉は驚きました。何をするかと思うと、大変な強い力でイキナリグングン足を引っぱられ初めましたので、今にも足が腰のつけ根から抜けてしまいそうで、その痛いこと痛いこと。

「痛い痛い。ヒイーツ」

と豚吉は死ぬような声を出し初めました。

これをきいた娘のお母さんは気が気でありません。

「あれ、もう止して下さい止して下さい。娘の足が抜けてしまいます。足が抜けて死んだら大変です」

と泣きながら止めましたので、村の人も引っぱるのを止めました。

「この上引っぱったら足が抜けるばかりだが、どうしたらいいだろう」

と村の人は相談を初めました。

「仕方がないから鍬（くわ）を持って来て、まわりから掘り出そう」

「それがいいそれがいい」

と云うので、又みんな村へ帰って、めいめいに鍬（すき）や鍬を持って来て掘り初めました。

「みんな、気をつける。娘さんの腹へ鍬や鍬を打ちこむな」

と大変な騒ぎになりました。

ヒヨロ子はそんなことは知りません。最前の通り、二粒か三粒宛（ずつ）御飯を口に入れて、よく念を入れて噛んでは、お汁（つゆ）をほんのすこし嘗めながら、やっと御飯を一杯とお汁（つゆ）を一杯たべてしまいまして、又一杯食べようとしてみますと、何だか裏の方で人が騒いでいるようです。

「サア、人間掘りだ人間掘りだ」

「まだ生きているんだぞ」

「怪我（けが）させぬように掘出せ掘出せ」

と云う声もきこえます。

「マア、人間掘りなんて初めて聞いた。珍しいこと。御飯はもうおやめにして、ちょっと見てきましょう」

とお茶を飲んで立ち上って、腰をグッと屈（かが）めながら、低い裏の入り口から出て行って見ました。

ヒヨロ子が裏へ出て見ると、向うの方で大勢人が寄って、土を掘りながら何か騒いでいます。何事かと思って近寄って見ると、こはいかに。豚吉の足が二本、井戸の中からニューと出ておりますから、驚いてすぐに走り寄って、その足を両方一時に掴（つか）まえて、

「ウン」

と引っぱりますと、スッポンと抜けてしまいました。それと一所に下から女の児の泣き声が聞えて来ましたので、ヒヨロ子は井戸の口から長い長い手を延ばして、女の児の手を捕まえて、スーッと引き上げて上へ出してやりました。

村の人はもうヒヨロ子の力に驚き呆（あき）れて、口をポカンと開（あ）いたまま見ておりました。

女の児のお母さんは泣いて喜びました。

豚吉も嬉し泣きに泣きながら、脱いだ着物を着て、最前のめしや[# 「めしや」に傍点] に帰って来て、ヒヨロ子に今までのこととお話ししますと、ヒヨロ子も涙を流して喜んで、

「それはよいことをなさいました」

とほめました。

ところが、いよいよ御飯の代金を払おうとしますと、豚吉のお金入れが見当りません。これはきっと最前の井戸のところに落して来たに違いないと思って、又探しに行ってみましたが、そこにもありません。

二人は顔を見合わせて、どうしたらいいか困っておりますと、表の入り口をガラリとあけて、最前馬に引ばられて走って行った馬車屋のお爺さんが這入って来ました。そうして二人の顔を見ると喜んで、

「ヤア、あなた方はここに居りましたか。私は馬が急に駈け出しましたので、一生懸命で引き止めようとしたのですが、どうしても止まりません。やっと向うの町の入り口まで来ると止まりました。それから、あなた方はどうなすったかと思って引き返して見ますと、ここの表の処に私の落した鞭が引っかかっています。それから入り口の処にお金入れが落ちておりましたが、これはもしやあなた方のじゃありませんか」

と云いました。

夫婦は馬車屋の親切に涙を流して喜びました。そうしてお礼を沢山に遣ったあとで、御飯の代金を払ってこの店を出ました。

豚吉夫婦はそれからだんだんと町に近付きましたが、町の入り口まで来ると、そこに大きな河がありまして、水がドンドン流れています。その上に橋が一つかかっている、その橋を渡らなければ町へ這入れられません。

「サア町へ来た。向うの町に這入ると、きっといいお医者があるのだ。そうしたらお前も私も身体（からだ）を当り前の恰好にしてもらえるのだ」

と云いながらその橋を渡ろうとしますと、橋のところの小さな小屋から二人の様子を見ていた番人が、

「モシモシ」

と呼び止めました。

豚吉とヒョロ子はうしろから呼び止められましたのでふり返って見ると、それは一人のお婆さんでした。そのお婆さんは二人の様子をジロジロと見ながら云いました。

「私はこの橋の番人だがね。お前さん方はこの橋を渡るならば渡り賃を置いて行かねばなりませんよ」

「そうですか。おいくらですか」

と豚吉は云いながらポケットからお金入れを出しますと、お婆さんは又こう云いました。

「けれども、当り前のねだんでは駄目ですよ。当り前だと一人分一錢宛（ずつ）ですが、あなたの方は当り前の人間の倍位肥っていられますから、その倍の二錢いただきます。それからあっちの奥さんは、やっぱり当り前の人よりも背丈が倍ぐらい長いようですから、やっぱり倍の二錢出して下さい」

これをきくと、豚吉は出しかけたお金を引っこめながら、

「おいおい、お婆さん。馬鹿なことを云ってはいけない。いかにも私の身体（からだ）は他人（ひと）の倍ぐらい肥っているが、背丈は半分しかないから当り前の人間と同じことだ。あのヒョロ子でも背丈は当り前の倍ぐらいあるが、その代り当り前の人間の半分位痩せているから、これも当り前の渡り賃でいいだろう。さあ二錢あげるから、これで勘弁しておくれ」

と云いました。

ところがこれを聞くと、お婆さんは大層憤（おこ）ってしまいまして、小さな小舎（こや）から出て来ると、橋のまん中に立って怒鳴りました。

「お前さん方は何です。人並外（はず）れた身体（からだ）をしながら当り前の橋賃でこの橋を渡ろうなんて、ずいぶん凶々しい横着な人ですね。私を年寄りだと思って馬鹿にしているのだね。そんなことを云うなら、この橋はどんなことがあっても渡らせないから、そうお思い」

豚吉はその勢（いきおい）の恐ろしいのに驚いてふるえ上ってしまいました。けれどもこの橋を渡らなければ町へ行かれないのですから、豚吉は元気を出してお婆さんを睨み付けました。

「この婆（ばばあ）は飛んでもない奴だ。貴様はだれに云いつかってこの橋の渡り賃を取るのだ」

「生意気なことをお云いでない。あの向うの橋の渡り口を御覧.....あすこにお役所があるだろう。あのお役所の云い付けでここに番をしているのが、お前さんたちはわからないか。愚図愚図云うとお前さんたちの首に縄をつけて、あすこのお役人の所へ連れて行つて獄屋に打（ぶ）ち込んでしまおうが、いいかい」

と大変な勢いです。豚吉は又青くなってしまうました。

さっきからこの様子を見ていたヒョロ子は、この時そつと豚吉の袖を引かして、こう云いました。

「およしなさい。こんなお婆さんと喧嘩をするのは……。それよりもこの河は浅そうですから、私
があなたを背負って渡りましょう」

と云いました。

豚吉はこう云われて河の方を見ましたが、成る程、河の水はザアザアと浅そうに見えて流れてお
ります。けれどもやっぱり何だか恐ろしそうですから、又元気を出して婆さんに云いました。

「いけない。いくらお役人に頼まれていても、一人の人間から二人前のお金を取っていいことは
あるまい。何でも一銭でこの橋を渡らせろ」

「いけない。そんなことを云うなら、もう百円出してもこの橋は渡らせない。喧嘩するならお出
(い)で。私が相手になってやる」

「何を、この糞婆ア」

と云ううちに、豚吉は真赤に怒って、イキナリお婆さんに掴みかかって行きました。

豚吉は、何をこの梅干婆(ばば)と、馬鹿にしてつかみかかって行きました。ところがその強い
こと、橋番のお婆さんはイキナリ豚吉を捕まえますと、手鞠(てまり)のように河の中へ投げ込
んでしまいました。

これを見ていたヒヨロ子は驚きました。

「あれ、あぶない」

と云ううちに、自分も河の中へ飛び込んで、

「助けてくれ助けてくれ」

と叫びながら流れてゆく豚吉のあとから、長い足でザブザブと河の水を蹴立てて追っかけまし
たが、間もなく豚吉を捕まえて、片手に提(さ)げて河を渡ると、今度は橋の向う側に上って
来ました。

これを見ていたお婆さんはカンカンに憤(おこ)って、橋を渡って追っかけて来ました。そうし
てヒヨロ子の腕を掴みながら、

「お前達は泥棒だ。橋の渡り賃を払わずにこの河を渡った者は懲役(ちょうえき)に行くのだ。
サア来い。お役所に連れてゆくから」

と怒鳴りました。

豚吉はふるえ上がってしまいました。

けれどもヒヨロ子は驚きません。婆さんに腕を掴まれたまま静かに云いました。

「そんなわからないことを云うものではありません。私たちはあの橋を渡らずにここまで来たの
です。橋を渡っていませんから、お金も払わなくていいでしょう」

と云いましたけれども、お婆さんはなかなか承知しません。

「いけないいけない。何でもお金を払わなければいけない」

と大きな声を出しました。

さっきからこの様子を見ていたお役所の役人は、あんまり夫婦の姿が珍しいので、みんな出て
来て三人のまわりを取巻いてしまいました。そうするとお婆さんは益(ますます)勢(いきお
い)付いて、やっぱりヒヨロ子の腕を掴んだまま怒鳴り立てました。

「お役人様、この夫婦は泥棒ですよ。橋賃を払わずにこの橋を渡ったのです」

「いいえ、違います」

と、流石(さすが)に堪忍(かんにん)強いヒヨロ子にも我慢しきれなくなって云いました。

「あなたが初め私達二人に倍のお金を払えと云ったから、私たちは河を渡ったのです」

「ウン、そんなら橋賃は払わなくてもいい」

と、一人の年老(と)った役人が云いました。これをきくとお婆さんは一層怒って、

「ええ、口惜(くちお)しい。あなた方は泥棒の味方をするのですか。そんならこの腕をヘシ折っ
てやる」

と云ううちに、ヒヨロ子の腕に両手をかけました。

ヒヨロ子は驚きました。腕をへし折られては大変ですから、思わずその手を一振り振りますと、
それに掴まっていたお婆さんは、まるで紙布のように宙に飛んで、河の中へポチャンと落ちてド
ンドン流れてゆきました。これを見た役人たちは、

「ヤッ、大変だ」

というので、みんな婆さんを助けに走ってゆきます。ヒヨロ子もビックリして助けに行こうとし
ますと、今度は豚吉が腕を捕まえて離しません。

「今の間に逃げろ逃げろ」

と云ううちに、ヒヨロ子を引っぱってドンドン逃げ出しました。

豚吉とヒヨロ子夫婦は、成るだけ人の泊らない淋しそうな宿屋を探し出して泊りますと、豚吉の
着物を乾かしたり、お昼御飯をたべたりしましたが、それから宿屋の番頭さんと呼んで尋ねまし
た。

「私たちは見かけの通り、身体(からだ)が長過ぎたり太過ぎたりするものですが、この町に私

達の身体（からだ）を当り前に治してくれるお医者さんは無いでしょうか」

「それはよいお医者があります」

とその番頭さんは云いました。

「この町の外れに一軒のきたないお医者様の家（うち）があります。その御主人は無茶先生と云って、無茶なことをするので名高いのですが、どんな無茶なことをされてもそれを我慢していると、不思議にいろんな病気がなおるのです」

「フーン。その無茶とはどんなことをするのだ」

と豚吉が心配そうにききました。

「それはいろいろありますが、わるいものをたべてお腹が痛いと言つと、口から手を突込んで腹の中をかきまわしたり、眼がわるいと云つと、クリ抜いて、よく洗つて、お薬をふりかけて、又もとの穴に入れたりなされます」

「ワー大変だ。そんな恐ろしいお医者様は御免だ」

「それで御座いましょう。どなたもそれが恐ろしいので、その無茶先生のところへは行かれませぬ。そのために無茶先生はいつも貧乏です」

「もうほかにお医者様は無いか」

「そうですね。只今ちょっと思い出しませんか」

「そうかい。又上手なお医者様があったら知らせておくれ」

「かしこまりました」

と番頭さんは帰ってゆきました。

「あなたはその無茶先生のところへお出（い）でになりませんか」

とヒヨロ子が云いますと、豚吉は眼をまん丸にして手を振りました。

「おそろしやおそろしや。そんなお医者様のところへ行つて、殺されたらどうする」

「でも、どんな病気でも治るといふではありませんか。一度ぐらい殺されても、又生き上ればよいではありませんか」

「お前は女の癖に途方もないことを云う奴だ。もし生き上らなかつたらどうする」

「そんなことをおっしゃつても、あなたはまだそのお医者様が上手か下手か御存じないでしょう」

「お前も知らないだろう」

「ですから試しに行つて見ようではありませんか。もしその先生のおかげで私たちの身体（からだ）が当り前になれば、こんな芽出度（めでた）いことはないでしょう」

とヒヨロ子が一生懸命になつてすすめますので、豚吉もためしに行つて見ることにきめました。

豚吉とヒヨロ子はそれから連れ立って町の外れへ来てみますと、成る程、そこに一軒のキタナイお医者様の札が出て、無茶病院という看板が出ております。ソレを見ると豚吉はもうふるえあがつて、

「おれはいやだ。無茶病院という位だから、どんなヒドイ目に会わせられるかわからない。帰ろう帰ろう」

と引っかえしかけました。それをヒヨロ子は押し止めまして、

「マアお待ちなさい。只先生に会つてお話をきくだけならいいじゃありませんか。そのあとで診（み）てもらつてどうだかきめたらいいでしょう」

と、無理に豚吉の手を引いて中へ這入つて行きました。

豚吉とヒヨロ子は無茶病院に這入つて、院長の無茶先生に会いますと、先生は髭もあたまも野蕃人のように長くのばして、素（す）っ裸体（ばだか）で体操をしていましたが、二人の姿を見るとニコニコして裸体（はだか）のまま出て来て、

「ヤア、よく来たよく来た。お前たちのような片輪は珍しい。しかも夫婦揃つて来るとは感心感心。おおかた当り前の身体（からだ）に治してもらいに来たのだらう。よく来たよく来た。おれがすぐに治してやる。お前たちのような病人を治すものは世界中におれ一人しか居ないのだ。さあ、こっちへ来い」

と独りでしゃべりながら、豚吉の手を掴まえて奥の方へ引っぱつて行こうとしました。

「一寸（ちょっと）待つて下さい」

と叫んで豚吉は手を引っこめました。

「あなたはどんなことをして私の身体（からだ）を治して下さるのですか」

「アハハハハハハ。貴様はよっぽど弱虫だな。そんなことではお前の身体（からだ）は治らないぞ。おれは貴様の背骨を引き抜いて長くしておいて、それにお前の身体（からだ）を引きのばしたのを引っかけろのだ」

「ワッ」

と、豚吉はふるえ上つて逃げ出そうとしました。それをヒヨロ子はしっかりと押え付けて、又先

生に尋ねました。

「それは痛くはありませんか」

「いいや、ちっとも痛いことはない。睡（ねむ）らしておいて、その間に済ませてしまうのだから」

「ああ、安心した。それじゃやってもらおう」

と豚吉が云いましたので、ヒヨロ子はやっとならんと豚吉の手を離しました。

「それじゃ、私の方はどうなさるのです」

と、今度はヒヨロ子が心配そうに聞きました。

「アッハッハッ。貴様たちは夫婦共揃って弱虫だな。お前の方もおんなじことだよ。ちっとも知らない間に治すのだよ。しかし、そんなに恐ろしがるなら、ちっと面倒臭いが早く済むようにしてやる。お前達はこれから獣（けもの）の市場へ行って、生きた鹿と猪（いのしし）を一匹宛（ずつ）買って来い。女の方には猪の背骨を入れて背を低くしてやる。男の方には鹿の背骨を入れて背を高くしてやる」

「エッ、猪と鹿の骨を」

と二人は眼をまん丸くしました。

「そうだ。そうすれば、お前達の骨を引っぱり延ばさなくてもいいから、わり合い早く済むのだ」

二人は顔を見合わせました。二人は猪や鹿の骨を背中に入れられるのは好きませんでしたけれども、一生片輪でいるよりもその方がいいので、

「では猪と鹿を買って来ます」

と云って、無茶先生の家を出ました。

豚吉とヒヨロ子とは無茶先生の家を出て、この町の獣（けもの）市場に来ましたが、どこを探しても鹿だの猪だのを売っているところはありません。みんな牛だの馬だの犬だの豚だのばかりです。二人はしかたなしに市場の主人に会って、

「どこかここいらに、生きた鹿だの猪だのを売っているところは無いか」

と尋ねますと、主人は頭を振って、

「鹿や猪の肉を売っているところはありますけれども、生きたのを売っているところはありません。動物園になら居るかも知れませんが、あそこのは見物に見せるためで売るのはありませんからダメでしょう。しかし、一体そんなものをあなた方は何になさるのですか」

と尋ねました。二人はきまりがわるう御座いましたけれども、困っているところでしたからわけをすっかり話しまして、どうかして助かる工夫は無いものかと相談をしますと、主人は腹を抱（かか）えて笑い出しました。

二人はおこってここを出て行こうとしますと、市場の主人は又押し止（とど）めて、

「ちょっと待って下さい」

と云いました。

「この町から一里ばかり離れたところの村に神様があって、きょうがちょうどお祭りの筈です。そこには毎年いろんな見世物が来ますが、その中には獣（けもの）の見世物もあって、その中に猪や鹿も居る筈です。今年は来ているかどうかわかりませんが、行って御覧なさい。もしその見世物が居たら、お金さえ沢山出せば、ライオンでも象でも売ってくれるに違いないと思います。いっその事、あなた方は思い切ってライオンや象を買って、その骨を入れたら大きくて丈夫でよくありませんか」

と又笑い出しました。

二人は腹が立ちましたけれども、折角いい事を教えてくれたのですから、御礼を云ってここを出まして、それから二人連れでエッチラオッチラー一里ばかり歩いてその村に来ますと、成る程、村中は大変な騒ぎで、今が祭りの最中です。

その中へ世にも珍しい姿の夫婦がやって来たものですから、サア大変です。

「ヤア、見世物みたような珍しい夫婦が来た」

というので、ワイワイワイワイ押しかけて来て、夫婦は歩くことも出来ません。

豚吉もヒヨロ子も恥かしくなって逃げ出したくなりましたが、きょうは大切な用事で来たのですから逃げる訳に行きません。一生懸命で人を押しわけながら先ず神様へ参りまして、二人とも手を合わせて、

「どうぞ私どもの身体（からだ）が当り前の人のように恰好（かっこう）よくなりますように」

とお祈りを上げまして、それからお宮のうしろの見世物の処へ来ますと、そこは前よりも一層賑やかで、音楽隊の音や見物を呼ぶ声が耳も潰れるようです。

夫婦はビックリして立止まって見ておりましたが、そのうちに向うの方に獣（けもの）の絵看板を沢山に並べた一軒の見世物小舎が見つかりました。

豚吉とヒョロ子夫婦はその動物の見世物小屋の方へ行きますと、夫婦の珍しい姿を見に集まったものがあとから黒山のようについて来ます。それを構わずに夫婦はやがてその見世物小屋の前に来て、お金を払って中に這入りますと、あとからついて来た黒山のように沢山の人間も、夫婦の珍しい姿が見たさにわれもわれもお金を払って中に這入りましたので、大きな見世物小屋が一パイになりました。

二人は中に這入って見ますと、象やライオンや大蛇や虎の中にまじって、猪や鹿もおりましたので大喜びしまして、表に出て入り口の番人にこの動物園の主人に会わせてくれまいかと頼みますと、その番人はニコニコしながら、

「私が主人です」

と云いました。

「ヤア、それは有り難い、それなら一つ、私達夫婦からお願いしたいことがあるがきいてくれないか」

と豚吉もニコニコして云いました。すると主人は又一層ニコニコしまして、二人の顔を見ながら、

「それならば私からもお願いしたいことがあります。しかし、ここでは忙しくてお話が出来ませんから、こちらへお出でなさい」

と、夫婦を自分達の宿屋へ連れてゆきました。

動物園の主人は宿屋へ来ますと、夫婦にお茶やお菓子を出してもてなしながら、

「あなた方のお頼みとはどんなことですか」

とききました。夫婦は代る代るに、自分達が世にも珍しい片輪であることから、無茶先生のところへ来て治してもらおうと思ったこと、そうしたら無茶先生が鹿と猪を買って来いと言われたことまで話しまして、

「済まないが、お金はいくらでもあげるから、あなたの処に居る猪と鹿を私達に売ってくれまいか」

と頼みました。

動物園の主人はこれをききまして、

「それはお易いことです。今日でも売ってあげましょう。しかし、そんなことをなさらずとももつといい事がありますが、その方になすっちゃどうです」

と、又ニコニコしながら云いました。

豚吉は無茶先生から治してもらうよりももつといい事があると聞いて喜びまして、

「それはどんなことをするのですか」

と尋ねました。動物園の主人はエヘンと咳払いをしまして、

「それはこうです。あなた方は世にも珍しいお身体（からだ）をしておいでになるので、又そんなお身体（からだ）に生れて来ようと思ってもできる事ではありません。それを治してしまうのは惜いことです。それよりも一層（いっそ）のこと、私に雇われて下さいませんか。そうすればお金はこちらからいくらでもあげます。あなた方が二人、私のところに居らるれば、毎日見物人が一パイで、私は山のようにお金を儲けることが出来ます。どうぞあなた方御夫婦で見世物になって下さいませんか」

とまじめ腐って云いました。

豚吉はこれを聞くと、今までニコニコしていたのに急に憤（おこ）り出して、大きな声で動物園の主人を怒鳴りつけました。

「この馬鹿野郎、飛んでもないことを云う。おれたちはまだ見世物になるようなわるいことをしていない。貴様は何という失敬な奴だ」

と、真赤になって掴みかかろうとしました。

ヒョロ子は慌ててそれを押し止めまして、

「お待ちなさい。この動物園の御主人は何も御存じないからそんなことをおっしゃるのです。折角鹿や猪を売ってやろうとおっしゃるような親切な方に、そんなことを云うものではありません」

と云ってから、今度は青くなっている動物園の主人に向って、

「どうも私の主人は気が短いので、すぐ憤（おこ）り出して済みません。けれども見世物になることだけはおことわり致します。ほんとのことを申しますと、私達は人から見られるのがイヤで、婚礼の晩に逃げ出して来たくらいです。きょうでも只鹿や猪の生きたのが欲しいばかりに、あなたのところへ行きましたのです。ですから、済みませんが鹿と猪を売って下さいませんか」

とていねいに頼みました。

動物園の主人はガッカリした顔をしてきいておりましたが、やがてうなずきまして、

「それじゃよろしゅう御座います。売って上げましょう。今夜遅く、一時過ぎに入らっしゃい。生きた猪と鹿を箱ごと上げます。そうして車に積んで、無茶先生のところまで持たして上げますか

ら」

と云いました。

夫婦は喜んでお礼を云いまして、そこを出て、一先ず町の宿屋へ帰りました。

豚吉とヒヨロ子夫婦はその夜遅く動物の見世物小舎の前まで来ますと、もう見物人も何も居ず、音楽隊やそのほかの雇人（やといにん）も皆一人も居なくなって、表には主人がたった一人番をしておりましたが、二人を見ると、

「サアサア、こちらへお出でなさい。猪と鹿とをチャンと檻に入れておきました」

と、ニコニコして見世物小舎の中に案内しました。

ところが二人が何気なく見世物小舎に這入りますと間もなく、地の下に陥圀（おとしあな）が仕かけてありましたので、二人ともその中に落ち込んだ上に、その又陥圀（おとしあな）の中（うち）に在った蹄係（わな）に手足を縛られて、身体（からだ）を動かすことも出来なくなりしました。

その時に動物園の主人は穴の上からのぞいて、大きな声で笑いました。

「アハハハハ、ザマを見ろ。折角人が親切に雇ってお金を儲けさせてやろうと思ったのに、云うことをきかないからそんな眼に合わされるのだ。あしたからお前達を見世物にして、おれはお金をウンと儲けるつもりだ。サアみんな出て来い」

と云いますと、今まで隠れていた見世物の雇い人が出て来て、二人を押えつけて新しい檻の中に入れて、上から幕を冠せました。

檻に入れられるとすぐに豚吉はワーワー泣き出しましたが、ヒヨロ子は泣きません。かえってニコニコしながら豚吉の耳に口を寄せて、

「泣かないでいらっしやい。もうすこしするとこの檻から出られますから」

と云いました。豚吉は泣き止むと一所にビックリしまして、

「エッ、この檻の中からどうして逃げられるのだ」

と云いました。ヒヨロ子は慌ててその口を押えて、

「黙っていらっしやい。今にわかりますから。大きな声を出すと、逃げるときに見つかりますよ」

と云いましたので、豚吉は黙ってしまいました。

そのうちに動物園の主人が、

「サア、皆うちへ帰っていい。二人はもう檻へ入れたから大丈夫だ」

と云いますと、みんな帰ったようすで、そこいらが静かになりました。

ヒヨロ子は真暗い檻の中で豚吉の耳に口を寄せて、

「サア待っていらっしやい。二人でこの檻を出ますから」

と云いましたので、豚吉はビックリしました。やはり小さな声で云いました。

「どうして逃げるのだ。前には鉄の棒が立っているし、うしろの入り口には鍵がかかっているし、どこからも出るところは無いではないか」

「待って入らっしやい。今にわかります。私が先に出て、あとからあなたが出られるようにして上げますから、ジツとして待っていらっしやい」

と云ううちに、ヒヨロ子は前に並んではめてある鉄の棒の間から足を出しました。それから身体（からだ）を横にして少しゆすぶりますと、幅も厚さも当り前の人の半分しかないのですから、わけなくスーと外へ出ました。

それからヒヨロ子は、外を包んだ幕をまくって外へ出て、そこいらから大きな丸太ん棒を拾って来て、豚吉が這入っている檻の鉄の格子の間に突込んでグイグイと押しますと、太い鉄の棒が一本外れました。

待ちかねた豚吉は慌ててその間から出ようとしてしましたが、まだ出られませんので、又一本外しましたが、まだ出られません。又一本、又一本と、都合五本外しましたら、やっと豚吉が出て来ることが出来ました。

「助かったア」

と豚吉は嬉しまぎれに叫びましたので、ヒヨロ子はビックリして止めまして、

「そんな声を出してはいけません。誰か居たらどうします」

と云ううちに、檻の外にかかった幕を揚げて、見世物小屋の入口の処に来ますと、さっき居た主人はどこに行ったか見当りません。いいあんばいだと、二人は真暗な中をドシドシ逃げてゆきました。

動物園の見世物の主人はそんなことは知りません。

二人を檻に入れますとすぐに宿屋に帰って、自分の手下の中（うち）で画（え）をよく書く者に、ヒヨロ長いヒヨロ子の姿とブタブタした豚吉の姿を描かせました。それを夜の明けぬうちに見世物小屋の上にあげさせました。それを眺めて動物園の主人はニコニコして、

「これでいいこれでいい。サアみんな寝ろ。あしたは見物が一パイに来るに違いないから、みんな

早く起きて来るんだぞ」

あくる朝になりますと、見世物小舎の主人は、前の晩に豚吉夫婦を捕えて檻の中へ入れたり何かしたものですから疲れたと見えまして、たいそう朝寝をして眼を覚ましましたが、見ると雇人（やといにん）もまだみんなグーグーと睡っています。それを一人一人に起こして、揃って御飯を喰べて、見世物小舎の前に来て見ますと、この小舎の前はもう人間で中に這入れない位です。その人々は皆口々に、

「早く入り口をあけるあける」

「あの看板に出ている珍しい夫婦を見せる見せる」

と怒鳴っています。それを早起きして来た動物の番人が一生懸命で止めています。

見世物小舎の主人は飛び上って喜びました。その大勢の人を押しわけて中に這入りますと、いきなり高い処に上って演説を初めました。

「サアサア皆さん、静かにして下さい。今から皆様にあの看板の通りの世界一の珍しい夫婦を御目にかけます。あの夫婦は昨日（きのう）この見世物小舎に見物に参りましたのですが、御覧の通り珍しい姿ですから、私が百万円出して夫婦を買い取りまして皆様にお眼にかけることにしました。ですから、あれを御覧になりたいとおっしゃる方は、一人前一円宛（ずつ）お出しにならねばお眼にかけません。サアサア皆さん、又と見られぬ世界一の珍しい夫婦です。おかみさんの高さが一丈八尺もあって、旦那様の高さがたった三尺という百万円の珍夫婦……一円位は安いものです。入らっしゃい入らっしゃい」

これをきくと、何しろ大評判な上に又と見られないというので、われもわれもと一円出して、見る見るうちに中は一パイになってしまいました。

そうすると見世物小屋の主人は今度は中に這入って来て、見物の前に立ちまして、

「サアサア皆さん、よく御覧なさい。これが世界一の珍夫婦です」

と云ううちに、前にかかっていた幕を外しますと……どうでしょう……丈夫な鉄の格子が五本も外れて、中には夫婦の姿は見えません。

見世物小屋の主人は肝を潰しました。

「こりゃあどうじゃ、いつの間に逃げたんだろう。その上にこの丈夫な檻の格子を破るなんて何と恐ろしい力だろう」

と呆気（あっけ）に取られておりました。

けれども見物は承知しません。

「ヤアヤア、その珍しい夫婦はどうしたんだどうしたんだ」

とわめきますので、見世物小屋の主人は頭を抱えて、

「昨夜、檻を破って逃げられたんです。たしかにこの中に入れといたんですが」

と云いましたけれども、見物はやっぱり承知しません。

「その檻を破るような人間があるものか。貴様は嘘をついているのだろう」

と、みんなワアワア騒ぎ出しました。これを見ると主人は慌てて、

「嘘じゃありません嘘じゃありません。御勘弁御勘弁」

と云いながら、頭を抱えて逃げ出しました。

「アレッ、畜生、嘘をついてお金を取って逃げようとするか。泥棒だ泥棒だ。殴っちまえ殴っちまえ」

と云ううちに大勢の見物人が上って来て、見世物小屋の主人をメチャメチャに殴り付て、踏んだり蹴ったりしますと、めいめいお金を取り返して帰って行ってしまいました。

その時に豚吉とヒョロ子は町の宿屋に帰ってグーグー寝ておりましたが、そのうちに二人共眼がさめて、

「これからどうしよう」

と相談を初めました。

「せっかく見世物の鹿や猪を見つけたかと思うと、あべこべにこっちが見世物にされそうになって、危いところをやっと助かった」

と豚吉が云いますと、ヒョロ子もほっとため息をして、

「無茶先生が待っていらっしゃるでしょう」

と云いました。そうすると豚吉は何か一生懸命に考えておりましたが、やがて不意に飛び上って喜んで、

「そうだそうだ。うまいことを考えた。おれはちょっと行って来る」

と云ううちに宿屋を飛び出しました。そうしてやがて帰って来たのを見ると、市場から大きな馬と小さな豚を一匹買ってあります。

「サア、どうだ。馬と鹿なら似ているだろう。豚と猪（しし）も似ているだろう。だから、馬と鹿の背骨も、豚と猪（しし）の背骨も似ているに違いない。これでいいかどうか、無茶先生のところへ持って行って見ようではないか」

ヒョロ子もこれを見て大層感心をしまして、
「ほんとにそれはいい思い付きですね。どうして今までそんないい事に気が付かなかったでしょう」

と云うので、それから二人は連れ立って、馬と豚とを連れて無茶先生のところへ出かけました。無茶先生は昨日（きのう）の通り頭や髭を蓬々（ほうほう）として裸で居りましたが、豚吉夫婦が生きた馬と豚を持って来たのを見ると腹を抱えて笑いました。

「アハハハハハハ。鹿と猪の代りに馬と豚をつれて来たのは面白いな。お前たちさえよければ馬と豚の背骨でも構わない。入れかえてやろう。その代り鹿や猪よりも太くて、しかも長く持たないぞ」

「へエ。どれ位持つでしょうか」

「そうだな。鹿の背骨が千年持つならば、馬の背骨は五百年持つ。それから猪のがやはり千年持てば、豚のもやはりその半分の五百年持つのだ」

「それなら大丈夫です。私達は五百年の千年のと生きる筈はありませんから、せいぜいもう百年持てばいいのです」

「馬鹿野郎。まだ自分が死にもせぬのに、五百年生きるか千年生きるかどうしてわかる」

「ヤ。こいつは一本参りましたね」

と豚吉は頭をかきました。

「それじゃ私たちは五百年も生きるでしょうか」

「生きるとも生きるとも、馬や豚の背骨の中におれが長生きの薬を詰めて入れておけば、五百年位はわけなく生きる」

「ヤッ。そいつは有り難い。それじゃすぐに入れ換えて下さい」

「よし。こっちへ来い」

と云ううちに、無茶先生は豚吉とヒョロ子を連れて奥の手術場に連れ込みました。

無茶先生はやっぱり裸体（はだか）のままの野蛮人見たような恐ろしい姿をして、まず豚吉をそこにある大きな四角い平たい石の上に寝かしました。

それから、夫婦が連れて来た二匹の獣（けもの）のうち馬の方だけを手術場に引っぱり込んで、豚吉の横に立たせて、白い繃帯でめかくしをしました。

それから戸棚をあけて、一梃の大きな金槌（かなづち）とギラギラ光る出刃庖丁を持ち出して、まず金槌を握ると、馬の鼻づらをメカクシの上からカーパイなぐり付けましたので、馬はヒンとも云わずに床の上に四足を揃えてドタンとたおれました。

それから、驚いて真蒼（まっさお）になって見ている豚吉の頭の処へ来て、イキナリ金槌をふり上げましたので、豚吉は床の上にコロガリ落ちたまま腰を抜かしてしまいました。

ヒョロ子は肝を潰すまいことか、慌てて走り寄って無茶先生の手には縋りついて、

「マア、何をなさいます」

と叫びました。

無茶先生はヒョロ子に止められるとあべこべにビックリした顔をして、振り上げた金槌を下しながら怖い顔をして云いました。

「何だって止めるのだ。この金槌で豚吉の頭をなぐるばかりだ」

「マア、怖ろしい。そうしたら私の大切な豚吉さんは死んでしまうじゃありませんか」

「ウン、死ぬよ」

「死んだものに背骨を入れかえて背丈（せい）を高くしても、何の役に立ちますか」

「アハハハ」

と無茶先生は笑い出しました。

「アハハハ、そうか。お前たちはこの金槌でなぐられて死ぬと、もう生き返らないと思って、そんなに心配をするのか。それなら心配することはない。今一度殴れば生き返るのだ。ソレ、この通り」

と云ううちに、無茶先生は傍にたおれている馬の額を金槌でコツンと打ちますと、死んだと思った馬は眼を開いてビックリしたように飛び起きました。無茶先生は大威張りで、又馬を打ちたおしました。

「それ見る、この通りだ。豚吉でもこの通り」

と、イキナリ豚吉の頭に金槌をふり上げますと、

「助けてくれッ」

と豚吉は泣き声を出しながら表の方へ駆け出したので、ヒョロ子も一所に走り出しました。そのあとから、生き残った豚もくっついて走って行きました。

「ヤア大変だ」

と無茶先生がその豚を裸のまんま追っかけました。

「貴様は殺したあとで肉を売って喰おうと思っていたのに……ヤーイ……豚ヤーイ」

と怒鳴りながら駈出しましたので、豚吉は自分の事かと思って一生懸命に走ります。そのあとからヒョロ子が走ります。そのあとから豚が走ります。そのあとから無茶先生が真裸体（まっぴだか）で走りますので、往来を通っている人はみんなビックリし